仕事人秘録

行列のできる経営相談所 ⑧

富士市産業支援センター長

小出 宗昭氏

刺激に満ちた日興証券

日興証券での研修のチャンスをつかんだ。

「M&A（合併・買収）の勉強のために日興証券に1年ほど研修に行ってくれないか」。研修課長から意外な言葉をかけられました。自分としては信託の論文を書いたので、静岡銀行と友好関係にある信託銀行への出向をもくろんでいたので戸惑いました。

日興証券は静銀の主幹事を務めていた関係で人材を受け入れていました。日興は投資銀行の米ブラックストーンにも出資していて国際業務に積極的でした。これまでに「超」が付くほど優秀な静銀の若手行員2人が研修に出ていたので、「比較されたらたまらないなあ」と思ったのが正直なところです。

噂で聞いていたのですが、「（日興証券のM&Aを担当する企業情報部は）会議を英語でやっている」と言われていました。「そんなところでやっていけるだろうか」と私が戸惑いの表情を浮かべていると、研修課長は「じゃあ、この話は無しにしようか」と言います。即答できずに「すみません1日考えさせてくれませんか」と言ったような気がします。

でも、嫌で嫌でしょうがなかった国際部から〝合法的〟に抜け出せるわけですから日興証券にお世話になることにしました。気分的には「まあ、やってみるか」的なノリですかね。国際部は1年3カ月で出ることができました。

M＆Aの勉強のために日興証券で研修を受けた（左端が本人）

1992年4月から東京・丸の内の日興証券本社にお世話になった。

見るモノ聞くモノが新しいことばかり。あれだけ国際部時代に苦痛だった通勤も苦にならず、率先して朝一番で出社して新聞のクリッピングをしました。銀行はいろいろな規制で堅苦しかったですが、日興証券はとてもおおらかな社風だと率直に思いました。

バブル崩壊で証券業界は大変な時期に入っていましたが、仕事をしている中ではそんな重苦しい雰囲気は全くありませんでした。そうしたカルチャーだったのでしょうね。

ニューヨークとの電話会議で英語でのやり取りがありました。私のような新参者にも「小出さん、何か意見がありますか」と話を振ってくれたり、業界の調査をしたい時は日興リサーチセンターのアナリストを紹介してくれたりと分け隔て無く接してくれました。

「海外企業の買収案件もやってみませんか」とチームに誘っていただき、日本の製薬会社による米国の創薬ベンチャーの買収案件の初歩的なリサーチも手掛けました。こうした業界の調査はとても役に立ち、今の仕事でも生きています。競争環境や市場動向、将来性などは経営相談では必須ですから。刺激的で今までに無い視点や視座を与えてくれましたね。

ニューヨークのブラックストーンの本社にも行きました。投資銀行の威厳というか、エネルギッシュさに圧倒されました。日興証券での1年間は今の仕事の足腰を鍛えてくれましたのは間違いありません。

許諾番号30081863日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。

掲載日 2019年06月20日 日経産業新聞 015ページ

(C)日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。